

社會と自分

東京帝國大學教授 大 島 正 徳

先づあらかじめお断りしなければならぬ事は、私の今日申します事は、幼稚園の専門的研究や實際問題には直接の關りはないので、これを如何に幼稚園の實際に結びつけようかといふ直接問題即ち皆様のその日／＼には無關係の事であるといふ事でありませぬ。「社會と自分」なることが翻て皆様が皆様のお仕事に對せらるゝ時に何等かの關係を持つかも知れませぬがそれは皆様の心の中からであつて私自らには關りませぬ。よく人が人間は將來の爲に存在すると申しますがその意味から致しますと幼稚園にお仕事をせらるゝ皆様方は最も遠き將來の爲に生きらるゝ方であるぞ申せませう。人々は自己の延長として自己以外に將來を考へます、それは人によつて或は天國であり極樂でもありませう時には藝術的創作でもありませうが、自分の將來として、又民族の將來として精神的肉體的兩方面から人の誰しも考ふる處は必ず小さき幼兒でありませう。吾々の將來は國家の

將來は實にこの幼兒に俟つのであります、此の點からして諸君は最も遠く且つ最も大切な必然最も遠大なる仕事に従事せらるゝのであります。自己の將來、民族の將來である幼兒は必然に社會國家生活の最も將來を擔てゐるものでありますから、其の社會といふものは如何なるものであるか、その社會に生活する人間は如何なるものかといふ事は考へなければならぬ問題であつて、延いて未來の國家に就て考慮すると云ふ事は吾々にとつて極めて大切な事でありませぬ。未來の國家、そこには解決さるべき多くの思想問題をひかへて居ります、普選問題國際問題勞働問題都市問題數へつくせぬ多くの所謂思想問題なるものは大戦以來非常な勢と速度を以て發してまゐりました、この時に當て健全なる國家の將來は如何なるものであるかと云ふ事を考へるのは、それを直ちに幼稚園に於て幼兒に話さるゝ事は出来なくとも。皆様御自身の爲にそして社會の爲に大切な事で

あると思ひます。かうした前置きの後に私は改めてこの題目に就いて述べてみようと思ひます。

「社會と自分」即ち社會對自己といふ事は現代の問題でありかつ又將來の問題であります、それは現代のあらゆる思想問題に含まれ又現れてゐるものであつて「自分と社會」に對する考といふのは他の言葉に言ひ換へれば「自治的公民の精神」と云ふ事になります。從來吾々の持ち來た處の道德そのみでは現代乃至將來に處するには不充分であると思ひます、將來及現代に於ける國民道德は、立憲的な自治的な國民生活を營むといふ事であり、かういふ社會生活の間に處する吾々は立憲的自治的精神を持つべきであります。かく社會生活が立憲的で自治的である事を要求する現代に於てもし吾々が時代の進歩を無視して相變らず徳川封建時代の國家觀、道德觀のみであるならば吾人と現代生活との間には實に大なる間隙があり、爲めに精神上物質上多くの腐敗と危険が起るのであります。徳川時代から明治年代にかけての近き過去に於てはあまり考へられなかつた公民といふ事、公民としての生活が營まるゝ現代にあつては、公民的道德は必然に考へられなければならぬ事であり、

からぬ事であり、從來は、我が一身をどうしようか如何に處さうかと云ふ事に就てのみ考へて來ました。しかし現代は、國家社會なる一團の生活の中に吾を見出し吾が社會我が國家を離れない國家といふ團體の一員としての自らを見る様になつて來ました、この二者の間にはあざやかに大なる相異を見出します。勿論これは新しい見方といふものではありません。明治の初年に於て國家道德は可成盛に説かれました。又我が身をどう處するかといふ一身に就いての道德觀は人の實生活に關連してどの時代にも考へられたものであります。が國家道德といふものは動もすると戰爭の場合のみを考へられ平時の事に思ひ及す事はこれまでは甚だ少うございました、教科書などに於て見る國家道德でもその多くは戰時に關した事のみである但し今度の卷の六には平時の國家道德を見る事が出來ましたがこれまで説かれた國家道德が主として戰時に於てある爲に國家道德といへば勢ひ兵備になり敵視になり。斬たり張たりになつて、殺伐な國家意識が強くなるといふのは日清日露の大戰を経験して來た結果として止むを得ない事であつたのであります、既に世界大戰後の今日は

これのみである事を止むを得ずとする事は許されなくなりました。國家道德は即ち「國家社會」と言ふ意味から平時に於ての國家社會生活について考慮せられなければなりません。平和の中に於ける國家道德國際問題としてかの國際聯盟なるものは、最近三十年來の趨勢から當然打ち建てられるべきものであつたのがたゞ、大戦の終局を期として之が實現を呼び起したのであります。可成近い頃まで、「社會」と言ふ文字すら危険なものとせられかような衆合の場所で用ひるのを制せられたほどであつたのが今日は社會奉仕、社會改善、社會保護、社會何々と何事にも社會々々と言はるゝ様になつたのは大戦以後の著しい傾向であつて實に大戦の賜と云はなければならぬ。「國家社會」といふ意味に於て國家道德或は國家問題を考へて行くといふ心持ちは幼兒の時代から大切なものであるが我が國の幼兒達はこれまでは對外的な、戰爭ごつことのみして傳へられて來たといふ事は「日本男兒」と云ふ唱歌の例によつても理解せらるゝことである。或中學で「日本男兒」とは如何なるものかといふ問を出した處その多くの答案には「櫻の様な大和魂を持つものだ」と記されてあつたと

いふ。なせ彼等は芙蓉の峯の純潔さと櫻の花の赤誠をもつとは言はなかつたか、中學校時代の少年にまでかような象徴を持たしたと云ふ事はいかに吾々の國家觀が戦時の豫想のみにある月並みなものであるかと云ふ事が證據立てられるのである。この二つ以外の例を今一つ舉げれば、國家、とか家庭についてその社會生活なる事を考へて居ない或る青年が學校を終て歸省した時に彼は明かに人に「我が一身上に關しては研究的にも經濟的にも既に計畫は建た、扨國家に對しては、先づアメリカと戦争でも起れば出かけるばかりだ」と話したと云はれます。自己と社會との間をなせかように隔たものにして仕舞ふのでありませう。こゝに間隙を置くといふ事はそこに危険を生む原であります。社會生活を營む處の吾と吾の吾の住む社會とはもつと親しみ深い、もつと密接な關係にあるといふ處に目を附けるのが最も大切な事であります。現在吾々が社會生活を營みながらその社會道德に社會觀に多くの缺けた處のあるのは社會團體に於ける自分を見ないのに基因するのであつて、それ故に私は「社會と自分」なる問題へ行かなければならないのであります。

「社會と自分」その中に含まるゝ主なる論點を申せばこれまでは社會といふ字は口にする事さへ禁じられてあつたのが大戦以後種々な社會問題が起つて來て、人々がこれに就いて考へなければならなくなつて來たので社會と云ふ字は最も多く使用され從つて社會意識が現れて來たといふのである、が未だそれに就ての考が明瞭になつて居ない爲そこには間違も亦生ずるのであります。

扱吾々が社會生活をして居るのは人間在て以來の事で別に不思議な事ではありません、幾千年の昔から仕續けて來たこの事を今日に至て殊に氣が付く様になつたのには理由のある事でありませう。即ち今日では社會の狀態が動的になつてまゐりました。昔はそれは靜的でありました。人間が空氣の中に幾千年も生活し清い泉や川の源から容易に水を汲んで使用して居る間は人に空氣や水に就いて考へる必要はありませんでした、それは變化のない即ち靜的な狀態でありました、が扨急に暴風が起り降雨の爲に水が濁るような動的狀態によつて變化にあふとそこに於て人は空氣や水についての自覺を持つ様になり其の作用につき供給に就いて考慮する様になりま

す。同様の意味に於て社會生活の靜的な變化のない昔に於て人はそれを自覺しませんでした、昔の社會生活は變化のない即ち靜的なものでありましたが明治時代更に前に逆で徳川時代になると五十年百年變らぬ社會が續いたのでその社會に住む者は社會といふ事を少しも考へ及びませんでした。あの田舎の豪家にある大黒柱、その一本から都會の家の柱が十二本も造られると云はれてゐるほど太々とした柱を建てて實に永住な從て事なかれ主義な相も變らぬ社會生活が打ち續いたのであります、が、今日は田舎でも雜誌も來るし新聞も行きそして其處には小作農民問題、勞働問題といふ社會問題が生活に喰ひ込んで非常に動的になつて來ました。が然しまだ田舎は比較的靜的と申せませう。このお互の間の利害關係の益々複雑になつて來た都市の社會生活は、動的以上に目のまはる程の混亂をさへ來してまゐりましたこの事は大戰終局後に於て殊に著しく、實に世界大戰に依て社會に大地震が起りその爲諸種の問題も勃發して來たとも思はれるのであります、即ち最近社會問題の續發は殆ど數ふるに暇ないほどであります、これ迄は社會生活が無かつたのではなくそれが靜的

であつた爲吾々は之を見出さなかつたのであります、大戦後、この激しき動搖によつて初めて吾々がこれに氣付き、之を見出したのであります「社會と自分」といふ事はもつと速くに考へられべき事がらであるのであります、それがそれを内面的に考へる餘裕或は機會を持たなかつたのであります、大戦後初めて社會を見出し當然考慮せねばならぬ問題として俄にこれを考ふる時其處には或は過激な或は溫和な多種な考察が行はるゝようになりました。

俄に形造られた様な感じのするこの社會、に對して我々が如何なる態度、如何なる心得を持たなければならぬかといふ問題は目下の必然なとして重大な熟慮をしなければならぬものであります。

社會とは自分と他人との關係であります、が日々、時々變て行く各人の間には種々なめんどろな問題が複雑にからまつて起ります、この混雜な社會關係は何とか整理をしなければ遂には立つ瀬がなく、なると思はれます、社會關係を整理する事、それは即ち社會制度改造論であります、政府はそれが實行として社會政策保護政策を行ひ或は公營住宅を建て簡易食堂を設け托兒所を經營して社會に續發する日々

の諸種の出來事を出來る丈溫和にしようと思ひて居ります、ごく極端なものは或は全き平等を叫ぶものさへあります。

我々自ら社會の中に生活して居るのであるから、何とかこの大勢のお互の關係を整理すべき方法、生活の爲方を改良すべき方法それは今日至る處に呼ばるゝ、「生活改造論」であつて日々我々は之をひしひしと身に感ずるのであります。

自分は一人で生活するのでなく多數の中に生活するのである故に何とかこの社會生活を改善しなければならぬといふ。社會制度の改善を呼ぶといふ事は吾人の大なる發見で此の時勢のもたらした思想上の大變化であります、私の申すまでもなく現代人は此のことを意識して來たのであります、がたゞ此の意識のみでは足りないと思ひます、この意識のみを知てそれ以上の事を知らない爲に其處には種々の不平等が度はづれて起るのであります。社會に於ける自分を見てそれ以上を見ないといふ事は一大缺陷であります、それ以上を見ないのが何故いけないかと思ひます、吾々が斯うなるのは皆社會の罪である善い事悪い事皆社會に一切の責任をなすり、社會制度が

皆悪いからだと致しますが、然し或意味ではそれもさうでありますが斯様な考ばかりに生きると誰にも責任が無くなる。「己の食へない事、それも社會の罪である」と、皆他に責任を押しつけるのであります。さらば社會制度をよくしたらすぐに誰もが善人になるかと言へばさうではありません。個人の善悪何でも社會の責任とする、此の無責任な論は現代の論潮であります、悪い人は無い社會が悪いと言ふ無責任なる氣持ち「小人は之を人に求め君子は之を己に求む」と論語にも申しますが自分に責任を奉じない、盲動の多いといふのは社會全體それのみを見てそれ以上に考へない故であります。「現代人は社會を見出したがそれ以上を見出さなかつた」、この論點のみを擧げて私は次へうつりませう。

然らば之以上に如何なる事を氣づくのが正統な事であるか。自分の中に社會がある、吾の中に日本が、そして人類が家族が幼稚園團體が有り同時に團體の中に自分があるのであります。會員といふのは會の中に入居るのであると同時に自分の中に會全體が含まれてゐるのであります。或人がアメリカに行きました或人を伊藤氏としますが彼の地の人は

伊藤が來たとは申しませう、日本人が來ると云ひませうこの一人の中には日本なる全體がありこの一人を通して日本の國家日本人の心理がみらるのであり、吾々が西洋人が來たといふ時、一人の中に西洋全體を見るのであります。この考へ方が吾々に大なる責任を持たすと云ふ事になるのであります。小さな芽一つ、葉一つの中に一本の櫻の木全體があるのであります日本國民は一人の子の生立から伸びるのであります。部分の中に全體は解らないと云ふ、此の見そこなひに危険思想が胚胎するのであります。即ち今日我々の注意すべき點は、社會の中に吾があると同時に吾の中に社會ありと云ふ事を見出す事でありませう、吾々一人の存在の中にはこれまでの日本國民の生命が存在してゐるのであります。一人の存在はそれを生理的に見ても大變なものであります肉體的に父母祖父母とさかのぼる時には一人の中に數へ盡せぬ多數があつて、一人は同時に萬人であること云ふ事になります。私の着物は私の着物ではあるが幾人の手を経て來たかわかりませぬ私の一枚の着物は社會連携關係に於てどれ丈の人によつて作り出され持ち來たされたかわかりませぬ、謂はゞ自分

の着物一枚の中に社會全體があるのであります。マツチ一本の儉約は私の節約であると同時に社會全體の經濟であります。マツチ一本の儉約も社會國家經濟の上から考へればおろそかには出来ません、獨り物質の上ばかりでなく思想生活に於てもさうであります、自分の考、その中には嘗て本で見た事人に聞いた事其他多くの物が含蓄されてゐるのであります、今私の述べる事が皆様にわかるのも、それは皆様がかねて解てゐられた事であるからなのでありますそれが右に左にお互にやり取りしその間に洗練せられて向上して行くのであります。經濟的にも肉體的にも精神的にもすべて社會は我の中に有るのであります。吾一人に一切の責任を負ふと云ふ考、これを國民の間に養ふ事が大切であります。繩引をする時に協同一致が大切であるといふ事はわかりきつた事でありますがもし其一群を十人として我は十人の中の一人である、皆が引くなら引いてやらう自分一人引くのはいやだと云てお互に顔を見合せてゐたら、これは依頼根性で、社會の中の自分を知てゐるが自分の中に社會のある事を知らぬものであります。我の中に十人ありと思つて引けば其の力は必ず一致する

のであります、十人に代ても引くと云ふ時に勝ちを得る事は當然の秘訣であります。又委員會など云ふ時、十人の委員會だから我一人やつてはつまらないといふ、己は十人の中の一人であるからとAも思ひBも思ひしてゐては結局委員會はだめになるのであります。十人の中の一人なる吾は同時に我一人で十人を負ふ、我は委員の全體を負ふといふ約束を持てゐるのであります。依頼根性は、社會の一員といふ事は思ふが、我の中に社會ありといふ事は思はないのであります。選舉などの時でもさうであります此の一票に萬票の含まるゝ事を思ふならば一票はほんの一票にはあらずして萬票の價値を持つものであります。我の中に社會をみるといふ心持は自治的立憲的な健全な國民精神であります。社會の中に我ある事を知つた時更に進んで我の中に社會ある事を知らしむるといふ事は日本國家の改造さるゝ原動力であります。我よりして社會國家をなほす、まづ我からなほすといふ考へ方は自治的立憲的な健全なる國民精神の基礎であります。更に社會關係の道德に就て今少し述べて見ます、私はこれを見ず知らずの人々の關係の道德、と申します。自分の中に社會がある、

知らない全體がある日本、東京等の全部がある、かようなあかの他人を社會關係の人間として考へる時自分が正當な事を考へるのは、即ちあかの他人の爲に善くなる事になります。此の「見ず知らずの道德」はこれまではあまり言はれて居りませんでした。幼稚園の中の實際問題としては、むしろそれは、「知り合關係」であつて「見ず知らずの關係道德」ではないけないかもしれません。私が私共としては「知り合關係」のみといふのは現代の社會生活に道德的根據を與へられぬ事になるのであります。昔の家の子と藩君の關係からして吾々は「知り合ひ」には親切でありましたが「人と見れば泥棒と思へ」と云はるゝ言葉でも解る様に「見ず知らずの關係」に於て少しも道德觀念を持って居りません、知人を「お方」として尊敬し未知の人を「奴ヤツ」として取扱ふのもその例であります。「知り合關係」に於ける道德とか禮儀は丁寧すぎるほどにまで養はれて居りますが、「見ず知らずの關係」には何の禮儀も道德もありません。嘗て佛蘭西の或雜誌にもこの意味で日本人を不可解の人間であること云てありました。吾々の社會にはまだ交通道德、水道道德、電氣道德、ビルディング道德が缺けて居りま

す。是等の缺けてゐると云ふのは、とりもなほさず自分の中に社會が無いからであります。友の物を借りるには云ひ譯をならべて使ひ扱會社の物となること平氣でむだ使をする、と云ふのは個人關係でないからであります、かような事は小さい問題と見られませんが、この個人關係でない、社會關係即ち「見ず知らず關係」の道德觀念が健全に養はれてあつたら今日の節約生活改善問題はさのみ大した事にはならないであります。我々が水道といふ公共物に對して「見ず知らずの道德意識」を持たない故に濫費し、又電燈會社がいまいましいからとて公共の財である電燈を公衆的、公共的關係を無視してむだに使ふ傾向は一刻も早く改善すべきであると思ひます。

我よりして社會を國家を、改造するといふ事は我が社會國家を健全にする基礎であります。大戰の賜として社會を見出し社會に於ける我を見出した現代人は速かに我の中に社會を見出して、更に強く更に新しくより善き社會道德の源を汲まなければならぬと思ひます。長い間多數皆様の御清聽を煩はした事を感謝いたします。

(在文責記者)